

第 38 回 安田女子大学・安田女子短期大学 エッセイコンクール

課題部門 テーマ：人を支えるということ

優良賞「手を貸すことだけが支えではない」

現代心理学科 2 年 2 組 下久保蓉

これは私が、人を支えるという経験を実感した時のお話です。私には 5 歳年が離れた兄がいます。私が 10 歳の時に兄が高校からの帰り道、車との接触事故にあいました。部活動が終わって帰る時間で季節は冬であったため、外は暗く双方の確認不足によって起きた事故でした。家には父と母と私でお好み焼きを食べるために、兄の帰ってくる時間に合わせて準備をしている最中でした。すると突然、家電^{いえでん}が鳴ったので丁度手が空いていた母が電話にでました。だんだん母の表情が陰しくなりしばらくして母が震えた声で父を呼び、父が電話に出ました。父は電話を切ったあとすぐに家を飛び出し兄のもとへ向かいました。父はひどく落ち着いた様子で電話に対応していましたが、電話を切つてすぐに携帯も持たずに飛び出した様子から冷静ではないことが分かったことを今でも覚えています。

私が母から兄が事故にあったと聞いたのは父が家を飛び出してからしばらくしてのことでした。母はひどく混乱しており、起きた出来事を整理しきれていない様子でした。家まであともう少しというところで接触したため、事故現場まで歩いてすぐでした。不幸中の幸いで兄は全治 2 か月の手足骨折のけがを負いましたが、命だけは助かりました。心配でいたたまれなくなったのか、母もしばらくして兄の事故現場に足を運びました。私は当時 10 歳だったのですが、さすがに起きた出来事の大きさは理解できたため、母が家を出てから一人になってじっとはしていられず、兄が不安で窓から事故現場を何度も見ました。一人になったことへの孤独感や不安より兄への不安が大きく、それまでひどく空腹状態でしたが、食欲がなかったことを今でも覚えています。不安な気持ちでひどく疲れて母が家に帰ってきてすぐに寝てしまいました。

兄が家に帰ってきたのは深夜でした。兄の痛がる声で目が覚めました。手足を骨折しているため、用を足すこともひとりで動くのに苦労していました。兄は成績優秀であり、県内の進学校に進学し学校生活にも慣れ、部活動にも本腰が入ってきてここからというときに手足を骨折し、たくさんの自由が奪われ自分の思うように動けなくなってしまい、ひどく滅入っていました。とても明るくて人気者の彼は学校では平気なように振舞っていたと思いますが、家ではかなり落ち込んでおり、だんだんと元気がなくなっていました。普段から弱音は絶対に吐かない兄でしたが、事故にあつてすぐの時期はよく弱音を吐いていました。父や母は兄に歩くときやお風呂の時、また通学の際でのたくさんの援助をすることができていて、私は体が兄よりも小さいため父や母が兄の支えになっているのをただ黙って見ている

ことしかできませんでした。普段から優しく困っているときにはすぐに助けてくれる兄が弱って困っているときに私は何もできなくてとても悔しかったです。

私にも何かできることはないかと長い間ずっと考えていましたが、時間はどんどん進み、兄はだんだんと本来の元気を取り戻していました。兄のためにできることは少なく、ひどく落ち込んでいた私に兄は学校であつたいろんな面白い話をして楽しませてくれました。兄は楽しそうに話を聞く私の顔を見ながら「元気出た。」と笑顔で言ってくれました。私はその瞬間にこれだと思いました。兄が事故にあってから父も母も私も兄が一日でも早く完治することだけに一生懸命になりすぎて笑顔になることをわすれていたように思います。今までは笑顔で溢れていた生活が当たり前であっても、こんな簡単に笑顔は消えるものなのだと思います。そして笑顔というものがどれほど人の心の支えになるのかということにそこで初めて気が付きました。身体的に支えるのがすべてではなく、笑顔でいること、そして笑顔を共有すること、元気でいることの精神的なアプローチも人を支えていくうえで大事なことなのだと気づくことができました。この経験を糧にし、私は現在、心理学部現代心理学科で、精神的なアプローチからたくさんの人を笑顔にできる仕事に就くことを目標にしていろいろな知識を学んでいます。